海に比して更に一層廣大なる海面と其の有する凡ゆる地理的重要性が結合し地政學的考察の最も端的に究明せらるべきものを持つ——更に蘭印の地域を日本地政學の立場より論じたる堂々の論文である。蘭印の島嶼を一貫する自然的な運命共同體の性格を明にし、共存共榮の天の攝理の啓示を說く。そして蘭印こそは正しく我が最も近隣の國の一つに他ならず、吾等の故鄕の一たる南海の島嶼群に對する吾等の親愛の情でありまた日本地政學の鋭利なる究明であり、更に地政學的建設方策を論じたものである。第二編島嶼單位による地政學的考察、蘭印の特性たる島嶼を單位に第一章スマトラより第十一章ニューギニーに至るそれ〴〵の島嶼の持つ地政學的意義と價値を明確に論述してあますところがない。第三編外力浸潤の歷史的性格。印度勢力の支配、元軍のジャワ遠征、回教の支配と歐人の侵入、ポルトガル人の侵入、和蘭人の侵入等の各章は外力浸潤の必然的舞臺である東印度の、極めて複雜なものとなつた歷史發展の核心を把握して蘭印の歷史的性格を明確に描く。

第四編和蘭の政策の檢討、蘭印三百年間の支配者たるに至つた和蘭の政策を東印度會社時代より、蘭英の關係、有名なる强制栽培法の施行、アチェ戰爭等を說き土民社會を巧妙に操縱して此の地域本來の東亞的性格を失はしめるに至つた顚末、更に現代に於ける七千萬インドネシア民族に對する政策と民族運動を論じ、檢討し來つて極めて嚴重な摘發を行つてゐる。

第五編蘭印資源の地政學的意義、熱帶の光と熱と水に惠まれたる蘭印は其の資源の豐饒性が現在の蘭印に對する關心の最大なるものになつてゐるが、此の項は蘭印の經濟——ファーンヴァルの定義する複數經濟——が如何にして歐米中心に生產せられつゝあり、又如何にして將來必然的に變化せらるべきであるかを論じ、更に此の資源輸送遮斷の地政學的意義を明快に論斷し、現今國民の抱く最重大關心事に明快なる指示を與へてゐる。

以上まことに、この書ほど明確に、堂々と日本の立場より蘭印を論じたるもの今までになく、本書の出現によつて既刊蘭印關係の群書は其の影を失ふであらう。地理、歷史專攻の學徒はもとより、すべての識者、更に今蘭印を凝視する國民すべて必讀の良書であると信ずる。（昭和十六年九月、白揚社發行、A五判二百四十一頁、挿入の地圖、寫眞豐富、定價二圓）〔藤野義明〕

滿洲國境問題

增田忠雄著

吾が盟邦滿洲國が誕生してより既に十年を數へるが、未だ認識、檢討さるべき問題の多々存する事は論を俟たない。その一に國境問題がある。殊に滿蘇國境は單に滿洲國と蘇聯邦との國境としてでなく、ブロックとしての東亞に於ける蘇聯圈と東亞共榮圈との接觸面として理解さるべきであり、此所に現實の問題として滿蘇國境の持つ重要性がある。

滿洲の地は古來支那生活圈の周邊の地に屬してゐた。露の東進、從つてそれとの接觸、交涉が始まり、境界問題の惹起し出したの

は十七世紀も中葉以後である。而も露中央部の當初保持せる對支政策は商業的目的に終始してゐたのである。然るに十九世紀に入り、西歐諸國に帝國主義的政策勃興するや、露も優秀な技術の援助の下に、極東に於ける脆弱地域、支那支配圈への侵入、領土侵略を開始したのであり、此所に幾多の國境問題を生じた。之に從つて國境も、先づ隣接支配圈の接近より生ずる中間地帶の發生に基く帶狀國境より、兩者の交通線上に於ける接觸點を連結しての中間地帶の漠然たる分割、更に政治的支配の伸張、全面的接觸に依る完全な線的國境の樹立、その變更へと發展するのである。

本書は露の東侵に基く斯かる國境の發展過程を滿蘇國境の西北部、北部、東部に分つて視察、檢討されたものであり、著者が「局地的な滿蘇國境の發生過程の研究に依つて境界發生の各段階に於ける典型を、系統的に理解することが出來、又逆に境界發生の系統的研究資料によつて滿蘇國境の現段階へまでの發展過程を理解出來るのである」と云はれる所以である。然し著者は之のみを以つて滿足しては居られない。「國境の根本的安定のためには世界的立場に立つて、近代列强の各支配圈の合理的配置を行ひ、國境變更を意圖せしめるが如き不合理を一掃せねばならない。」而して寒帶生活に適應性を持ち、熱帶資源を缺如する蘇聯圈と、熱帶へ擴大する東亞共榮圈とが相互に地理的立場を自覺し、有無相通ずるならば「東亞共榮圈と蘇聯圈との境界なる滿蘇國境は、そこに思想上及び社會機構上の根本的差異は殘るとしても」「平和な政治經濟的境界と化し、茲に安定を見る事が出來るであらう」と結論せられ、此所に大乘的立場に立たれた著者の烈しき意圖を見得るのである。

要するに本書は百三十餘頁の小著に過ぎないが、吾等の重大關心事たる滿蘇國境に就いての適當なる認識と將來への正しき示唆を與へるには充分である。たゞ、一般讀書階級を對象とする本書の性質上、本書中に現出する都市、町村、河川を記入した地圖の卷尾への挿入、並びに難讀なる漢字にて記せられた地名等への振假名の附與あらばと欲したのは私一人ではなからう。以上にて簡單に紹介を終る。（昭和十六年八月、中央公論社發行、東亞新書定價一圓）〔岡本信太郎〕

日本農耕文化の起源

森本六爾著

故森本六爾氏の名は、同じく若くして逝いた中谷治宇二郎氏と共に昭和の日本先史考古學界に同じ意味での重要な位置を占むるものである。彌生式文化を口にする者は必らず森本氏を思ひ浮べる。それ程、氏と彌生式文化研究との關係は密接である。然らば氏は有坂銘藏氏の如き彌生式土器の發見者・命名者であつたのであらうか。或は新遺跡の科學的發掘者なるが故に著名なのであらうか。否森本氏はフイルドワークに適した人ではなかつた。氏の健康が第一之を許さなかつたし、それよりも氏は更に書齋の學者、綜合の學徒たる天分を有してゐた。氏は彌生式土器の底部に印せられた一粒の籾から彌生式文化の性格を把握せんとした。亦土器の型體の鋭い觀察から、貯藏用のものと煮沸用のものを區別した。